

第1章 「発達」という視点から捉える

本章で
学ぶこと

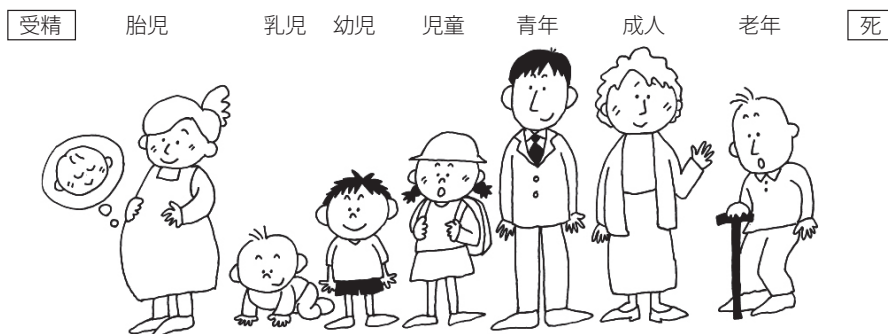
本章では「発達」という視点から、赤ちゃんが周囲の大人との関係性の中でどのように育っていくのかを見ていきます。そこでは、赤ちゃんが生まれながらに持っている人と関わる力が周囲の大人によって引き出され、そこで築かれる安心感や信頼感が土台となり、子どもは社会で生きていくために必要な力を身に付けて行きます。同時に親も保育者も、子どもを理解し寄り添う過程で発達していきます。こうした子どもも大人も共に発達過程にあるという生涯発達観に基づいて、子どもと大人の双方のwell-being, そして保育について考えていきましょう。

▶▶▶ キーワード：発達, 生涯にわたる変化, 育ち合い, 人と関わる力, 子ども理解

第1節 発達とは何だろう？

1. 「生涯発達」という考え方

「発達」とは何でしょうか？ 大学の授業でこの質問をすると、「身体が大きくなる」「できなかったことができるようになる」など、子どもが大人になる道筋をイメージした回答が多く返ってきます。こうした進化論的な考え方から発達を捉える時代もありましたが、今日の心理学においては、人は誕生から死までの生涯にわたって発達し続ける存在として「生涯発達」という考え方をします。つまり受精に始まる胎児期から死に至るまでの心身の変化が



発達ですから、私たちはみな発達の途上にあるのです。ここでいう心身の変化とは、身長や体重などの生物学的な量的変化と心と体の機能に関わる質的变化の両面を含みます。本テキストではこうした発達観に基づいて、私たちの育ち、そして保育を考えていきます。

発達の過程では「獲得」と「喪失」の2つの方向の変化があります。赤ちゃんでも身体が大きくなったり、できることが増えるなどの「獲得」ばかりでなく「喪失」があります。新生児期には、口に何かに触れるとそれを吸おうとしたり（吸啜^{きゅうてつ}反射）、手のひらに刺激を与えるとぎゅっと握りしめる（把握反射）などの原始反射と呼ばれる独特の運動パターンがあります。しかしそれらはしばらくすると自然に消えていきます。そして、原始反射の「喪失」を経て自分の感覚に基づいて対象と関われるようになっていくのです。次に、加齢に伴う変化を考えてみましょう。シニア世代になると記憶力が低下する、身体が弱ってくるなどの現象はイメージしやすいでしょう。こうした「喪失」の一方で、年齢を重ねることで豊かな経験や知恵などの「獲得」もあります。このように、人生のどの時期においても「獲得」と「喪失」の両方向の変化が起こっているのです。

これらの生涯にわたる変化を規定する要因には「遺伝」と「環境」があります。「遺伝」は生物学的に受け継がれるものであり、「環境」は個人をとりまく人、物、社会、文化などからなり、「発達」はこの両方が作用しあいもたらされます。そこで、次に人の発達に影響を与える「環境」について考えてみましょう。

2. 発達を規定する要因としての環境～他者との関わり～

エリクソン（Erikson, E. H.）は、生涯にわたる変化を「心理・社会的発達」として、個体の変化だけではなく社会との関わり、つまり環境としての「他者との関わり」から捉えました。そして、人生の周期（ライフサイクル）を8段階に区分して、次のように各段階で達成される課題とそれが達成されなかった場合の状態を対比させて示しました。また、発達段階ごとの危機の乗り越え方がその後の発達に影響を及ぼし、対で示された項目のうち、ポジティブな方がネガティブな方を上回るようなバランスが保てることで社会に適応した発達を遂げることができると考えました。

- ①乳 児 期：基本的信頼 対 基本的不信
- ②幼児前期：自律 対 恥と疑惑
- ③幼児後期：自発性 対 罪悪感
- ④学 童 期：勤勉 対 劣等感
- ⑤青 年 期：同一性 対 役割の混乱
- ⑥成人前期：親密さ 対 孤立
- ⑦成 人 期：生殖性 対 停滞
- ⑧老 年 期：自我の統合 対 絶望

第1段階の「基本的信頼」とは、赤ちゃんが養育者やその代わりとなる人から受け入れられ、困った時には必ず助けてもらえるという経験を通して得る信頼感をさします。また、このような関係性の中で「自分はできる」という自信が育まれることが自分への信頼感につながる意味でも大切です。この時期に獲得する信頼感は、それ以降に関わる人に抱く信頼感の基礎となるため「基本的」と付けられています。第2段階の「自律」とは、自分の意思で自己を統制しようとするのですが、その一方で養育者などによるしつけとぶつかることがあります。そのバランスがうまくいかないと、自分を恥じたり自分に疑惑を感じる可能性があります。第3段階の「自発性」とは、自分で目的を持って活動することですが、同じように他児も自発的な動きをする中で衝突することがあり、その過程で罪悪感を抱くことがあります。このような幼児期の発達とその援助については、第2部「幼児の育ちと援助」で詳しく学びます。

第4段階の「勤勉」とは、身体的、社会的、知的な能力を培い、学ぶ喜びを持って取り組むことで、第5段階の課題である「同一性(アイデンティティ)」は、他者とは違う自分であり、過去の自分も現在の自分も未来の自分も自分であるという連続性を持つことをさします。大学生の多くはこの段階にあり、卒業後に社会でどう生きていくかを考える上で、この「自分は自分である」という感覚を持つことは、その後の発達の道筋を左右する重要な意味を持ちます。また、第6段階の「親密さ」とは、さまざまな対人関係において相互性を体験して親密な関係を築くことで、第7段階の課題である「生殖性」では、子どもや次の時代を担う世代を育てることで自分を次世代に継承していくことが重要となります。「育児は育自」と言われるように、誰でもはじめは子育ての初心者であり、子育て経験を通して親自身も発達していきます。このように、親も保育者も子どもとの育ち合いの中で変化しつづける存在と言えるのではないのでしょうか。そして、第8段階の「自我の統合」では、自分の唯一の人生をあるべき人生だったと受け入れていくことが課題となります。

こうして見ていくと、保育の対象となる子どもだけでなく、私たち一人ひとりも「過去-現在-未来」の時間軸の中でその時々課題があり、「他者との関わり」の中で発達していくことがわかります。

3. 多様な水準からなる環境

ブロンフェンブレンナー(Bronfenbrenner, U.)は、子どもの発達に影響を与えるさまざまな環境を4つの水準から捉える生態系モデルを示しました。

- ①マイクロシステム：子どもが直接関わりを持つ人や物などです。親やきょうだい、保育者や友だちなどと子どもとの相互作用が発達に影響します。
- ②メゾシステム：「家庭と保育所」など、子どもが関わる複数のマイクロシステム間の関係が子どもの発達に影響します。

- ③エクソシステム：親の職場など、間接的ではありますが子どもの発達に影響を与える環境です。
- ④マクロシステム：子どもが暮らす社会のあり方・文化的状況など、より広い視点に立った環境も子どもの発達に影響を与えます。

ひとりで環境と言ってもこのような多くの水準からなり、これらが子どもの発達に影響を与えています。保育においては、子どもを取り巻く状況を広く捉えて一人ひとりを理解するとともに、よりよい環境を作り出していくことがとても大切になります。

第2節 赤ちゃんはやる気まんまん ～大きくなりたい！ヒトが大好き！～

赤ちゃんは環境としての人との関係性の中でどのように変化していくのでしょうか。本節では乳児期を中心に初期の発達から考えてみましょう。

1. 一生のうちで一番のスピードで大きくなる

<誕生時の赤ちゃんの身長と体重はどのくらいでしょう？>

人間の赤ちゃんは他の哺乳類に比べてとても未熟な状態で生まれてきます。馬や牛は生まれて数時間で立って、自分から母乳を飲みに行く様子を見たことがありません。歩けるようになるには約1年かかります。このように本来ならもう少し長く母胎内にとどまる場所を早く未熟な状態で生まれてくることを、ポルトマン (Portmann, A.) は「生理的早産」と呼びました。では、なぜ人間は生理的早産なのでしょう。人間の赤ちゃんはあと1年待つと脳が大きく成長してお母さんの骨盤を通れなくなってしまうのです。そこで、妊娠期間は「十月十日（とつきとおか）」と言われているように約10カ月間で、頭が骨盤を通れるうちに出産を迎えます。

こうして誕生した赤ちゃんの身長は約50cm、体重は約3,000gです。その後1歳になる頃には、身長は75cm程度に、体重は9kg近くまで増えます。誕生してからの1年間は最も身体の発達が著しい時期で、一生の間に1年間で身長が1.5倍も伸び、体重が3倍になることはこの時期を除いてほぼありません。このように健やかに育つには、安全・衛生・栄養などを守り大切に育ててくれる養育者の存在が不可欠です。そうした周囲との関わりの中で、身体とともに心も大きく育っていきます。

2. 人と関わる力を持っている

生まれたばかりの赤ちゃんがまどろんでいるときに微笑んでいるように見えることがあります。これは「生理的微笑」と呼ばれ、顔の筋肉がゆるむことで生理的に起こる新生児特有の反応です。養育者にとっては赤ちゃんが微笑む様子はたまらなく可愛く、言葉をかけたり、微笑み返したくなるなど、「生理的微笑」は大人からの応答的な働きかけを促していきます。

生まれて間もない新生児は視線が定まらず、視力も弱いので、ごく近い人やものを短時間ぼんやりと見ることしかできません。しかし、ファンツ (Fantz, R. L.) による選好注視法と呼ばれる実験で、生後数日しか経っていない赤ちゃんに人間の顔とそれ以外の模様を見せたところ、人間の顔を好んで見ることがわかりました。このように赤ちゃんは生まれながらにして人に関心があるのです。そして、生後3～4週間頃には自分に話しかける人の顔を見つめるようになります。また、2～3か月頃になると養育者があやしたり、笑いかけたりするのに応えて微笑むようになります。これは先述した新生児特有の「生理的微笑」が消失したのち、他者との関わりの中で楽しい、嬉しいなどの感情を伴って表れるので「社会的微笑」と呼ばれます。生理的早産で生まれてくる赤ちゃんには養育者が授乳やおむつ替えなどのさまざまな世話をする必要があり、両者の間に緊密な関係が生まれます。そこで養育者による応答的な関わりによって赤ちゃんが生得的に持っている「人と関わる力」は引き出され、その過程で養育者との情緒的な絆が形成されていきます。

8か月頃になると、養育者とそうでない人を区別する反応、いわゆる「人見知り」が始まります。養育者の姿が見えなくなると不安になって泣いたり後追いをするなど、養育者は赤ちゃんと一時も離れられなくなり、負担が増すこともあります。しかし、これは養育者と赤ちゃんとの間に情緒的な絆が形成された証であり、それまで大切に育ててきたことの成果とも言えます。この情緒的な絆をよりどころにして赤ちゃんは世界を広げていきます。

言葉の発達から考えてみましょう。言葉が話せるようになるのは1歳前後ですが、話せるようになるにはそれ以前のコミュニケーションがとても大切です。なぜなら私たちはまず最初にコミュニケーションの道具として言葉を獲得するからです。赤ちゃんが生まれながらに持っている「人への関心」に養育者が応え、安心感と信頼関係のもとでコミュニケーションは育まれます。そして、養育者が赤ちゃんの気持ちを代弁したり、語りかけるなどのやりとりを通して、赤ちゃんはその言葉を耳で聞き、その意味を少しずつ理解していきます。その過程で、自分からも伝えたいという気持ちが育ち、そこに言葉をのせて発するようになるのが1歳前後なのです。このように相手と気持ちが通い合い、大好きな相手とやりとりをしたいという気持ちが育つことが、言葉の発達において重要です。こうした赤ちゃんの発達を学ぶと、学生からは「乳児は未熟だとずっと思っていたがそうではなく、自分のできる範囲で思いを伝えようとしていて、それがその後の発達につながるということが理解できました」「赤ちゃんの行動には一つひとつ意味があることが分かったので、これから関わる機会があった

ら行動を注意深く見てみようと思います」などのコメントが寄せられます。赤ちゃんの側に立って「赤ちゃんが見ている世界」を感じる事が子ども理解の第一歩となるでしょう。

第3節 自分を感じることから始まる～社会性の発達～

2節で述べたように、子どもは養育者との間に築かれた安心感や信頼感を土台に世界を広げていくと同時に、社会で生きていくために必要な力も身につけていきます。本節では他者と共に生きる力がどのように育つのか、「社会性の発達」という視点から考えてみましょう。

1. 自分を感じる、他者を感じる

生後3か月頃になるとグーで握った自分の手をじっと見つめる様子が見られるようになります。これは赤ちゃんが自分の身体に気づき始め、確認していると考えられます。その後、自分の身体を触った時には同時に触られる感覚があるのに、他のものに触った時にはそのような感覚がないことから、自分とそうではないものの区別がつくようになっていきます。そして、養育者から声をかけられたりあやしてもらおう中で、他者への認識も芽生えることで1対1のやりとりができるようになります。ここでは、養育者と微笑み合う、おもちゃに注意を向けるなど、「自分と他者」「自分ともの」との関わりである「二項関係」が成立します。

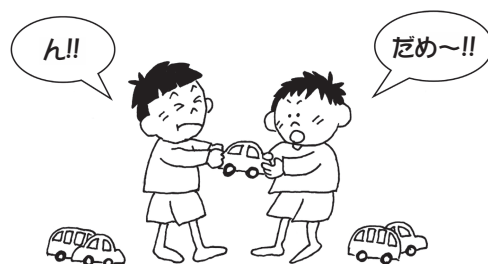
9か月頃になると、養育者が指さしたものを一緒に見るなど、自分と他者との関係の中で対象を認識できるようになります。これは、人と人との間に事物を介したやりとりに発展するので「三項関係」と呼ばれます。ここでは、単に相手と同じものを見るだけではなく、対象に向けられた相手の意図を読み取ることができるようになる点に重要な意味があります。なぜなら、相手が何に注意や関心を向けているかという目には見えないものに気づくようになることは、生きていくうえでとても大切な力だからです。また、この頃には例えば、初めて見るおもちゃに対して、養育者の顔を見て触ってもよいのかどうかを確かめるようなしぐさをします。このように信頼できる他者の表情を手がかりにして自分の行動を調整することを「社会的参照」といい、その後の対人関係の基礎となります。

2. 自分を表現する

1歳半から2歳頃には、鏡に映った像は自分であることを認識できるようになります。この頃から子どもは他者と異なる自分を意識するようになり、「自分でやりたい」「これはいやだ」など、自分の気持ちを表現する「自己主張」が強くなります。「第一反抗期」とも呼ばれる、いわゆるイヤイヤ期です。反抗という言葉で表現されますが、子どもは養育者に反抗する気持ちで行動しているのではなく、自分の思いを主張できるようになったのであり、子どもの発達においてとても大切です。また、自己主張ができるということは自分の気持ちを自由に

表現できる環境にあるという点でも重要です。

この時期には自分の自己主張が他児の自己主張とぶつかることもあり、いざこざは社会性の発達に欠かせません。例えばおもちゃの取り合いで悔しさや悲しさを体験することが、自他の区別や他児の思いに気づききっかけになるのです。



3. 他者の思いに気づく

保育所などでの集団生活では、相手とぶつかることで他児にも同じように気持ちがあることに気づき、それにより自分の気持ちを優先するのか、相手の気持ちを優先するのかという葛藤を体験します。その過程で、相手にゆずったり、折り合いをつけるなど、自分の気持ちを調整することができるようになっていきます。そこでは子どもの葛藤に寄り添い、子どもの気持ちに真剣に向き合う保育者の役割はとて大きく重要です。それは、子ども自身が保育者に受け入れられ理解される体験が、他児を受け入れ理解することにつながるからです。このように、生き活きと遊びこみ自己活動を充実させる中で他児の存在や気持ちと出会い、他者と共に生きる力が育まれていくのです。

第4節 考えずにはいられない~もっと知りたい! わかりたい! ~

次に示すのは3歳の子どもの生活の中でのエピソードです。そこには、どのような姿が示されているのでしょうか、考えてみましょう。

エピソード1

「ここ、とぶくろ、はさまれちゃうんだね」

ケンタがお父さんと一緒に電車に乗ってきた時のことです。

ケンタはピョンピョン飛び跳ねながらキョロキョロと車内を見回しています^①。そしてドアに貼ってある注意書きに目をとめました。そこには、「引き込まれないようご注意ください」という表示と一緒に、手を挟まれて怪我をしたクマのイラストが添えられています。ケンタはイラストをじーっと見つめた^②あと、お父さんに「はさまれちゃうんだね、ドアのここ」と言いながら、左右のドアが合わさる開閉部分を指でさしました。すると、お父さんは「そうだよ、はさまれると危ないね。でもそこじゃないよ、戸袋のここだよ」と言ってドアを引き込む部分を指でさしました。するとケンタはおそろおそろ戸袋を触りながら「ここ、とぶくろ、はさまれちゃうんだね」と言ってお父さんの目を見ました^③。

下線部①②③の場面において、ケンタはどのような気持ちでしょうか？
ケンタの「心の声」を想像してみましょう。

エピソード②

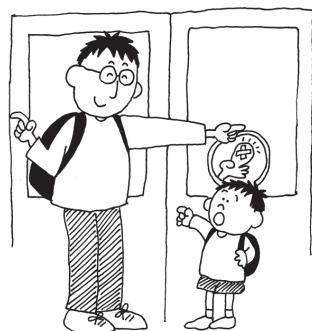
「きおう…？ きおうし…？」

モモカに、保育者が絵本を読んでいた時のことです。

ある場面で主人公が驚いて「失神する」という表現が出てきました。保育者がそのまま読むと、モモカは「『しっしん』ってなあに？」と聞いてきました^①。そこで、保育者は「そうねえ、びっくりして『気を失う』ってことかしら」と応えると、モモカは「きおう…？」「きおうし…？」とつぶやき始めました^②。

下線部①②の場面において、モモカはどのような気持ちでしょうか？
モモカの「心の声」を想像してみましょう。

エピソード①「ここ、とぶくろ、はさまれちゃうんだね」では、①ケンタが電車に乗ってワクワクする気持ちや何か面白い物はないかな？ など興味津々な様子、②目にとまった注意書きのイラストを見て、それまでの生活の中で出会った「はさまれる」がこの場面にも使えるかな？ と想像する様子が見られますね。そして、このことをお父さんに確かめながら、③「とぶくろ」という新しい言葉も知ったようです。



エピソード②「きおう…？ きおうし…？」では、①モモカが初めて出会った「しっしん」という言葉の意味を知りたい気持ち、②保育者が説明した「気を失う（きをうしなう）」という言葉も初めてで、どこで区切ったらよいのか、頭をフル回転させてありっただけの知識に関連づけながら考えて、「うし」の部分拾って牛の仲間も連想した様子が窺われます。

これらのエピソードには、子どもが主体的に世界を知ろうとする「考えずにはいられない」姿が示されているのではないのでしょうか。このように、子どもは日々出会う事柄に思考をめぐらしています。人間は本来、何かに面白みを感じ、それに取り組む中で自分の可能性を見出しながらよりよく生きようとする存在といわれます。子どもの「もっと知りたい、わかりたい」姿には、まさにこのことが映し出されています。ここでは、周囲の大人が子どもの目線に立って子どもが見ている世界を感じる事が大切です。そして、その思いに耳を傾けて

一緒に考え、楽しむ姿勢が子どもの心を育てると同時に、子どもの well-being に繋がるのではないのでしょうか。

第5節 発達を理解することの意義

本章では「発達」という視点から、周囲の大人との関わりの中で子どもが育つ姿を見てきました。このような発達の理解は保育を学ぶうえでなぜ必要なのでしょう。最後に発達を理解することの意義について考えてみましょう。

1. それぞれの時期の特徴を知る

まず、子どもの発達を理解することで、各々の時期の特徴を知ることができます。乳幼児期は発達の個人差が大きい点を踏まえなければなりません。基本となる特徴を押さえておくことで、一人ひとりに大切なこと、配慮する点を見出すことが可能になります。つまり、一人ひとりの子どもの側に立って、その子の育ちを理解するために発達の基本を押さえることが必要なのです。

例えば、初めて意味のある言葉を話し始めるのは1歳前後とされますが、1歳を過ぎても言葉を話さない場合、どのように考えたら良いでしょう。2節で学んだように言葉を話せるようになるには、相手に関心を持つ、相手の話す言葉を理解するなどの準備が必要です。そのため、「〇〇持ってきて」「ごみをポイしてきて」などの言葉がけを理解して、簡単なやりとりが成立しているかを確かめてみましょう。そうした力がついていれば、引き続き日常生活の中で子どもの行動や思いを言葉で代弁したり、子どもにわかりやすい言葉がけをするなどのコミュニケーションを取ることが大切になります。言葉が出てこないと親は心配になりますが、言葉はまず相手とのコミュニケーションの道具として生まれます。したがって、絵カードなどを使って覚えるのではなく、子どもが自分の思いを相手に伝えたいという気持ちが育つような関わりが大切です。このように、発達の道筋を知ること、今の課題は何かを考えて子どもの側に立った援助が可能になるのです。

2. どう発達していくのか、方向性を知る

次に、発達を理解することにより、子どもがどう伸びていくのかという方向性が見通しが立ちます。このような発達の方向性を知ることにより、保育の対象となる子どもたちの「これまで」と「これから」という連続性の中で、「今、何が大切か」を見極めていくことが可能になるのです。

ヴィゴツキー (Vygotsky, L. S.) は、個人の発達には文化・社会的要因の影響が大きいと考え、環境としての他者からの働きかけに着目しました。そして、現時点で「子どもが自分ひとり

でできる水準」と「保育者の援助や仲間と取り組むことによって可能となる水準」の差を「発達の最近接領域」と呼びました。この「発達の最近接領域」を捉えて、ひとりではできるようになるきっかけを与えるような工夫をすることが大切です。例えば、食べ物をフォークで刺すのがまだ難しい幼児には、あらかじめフォークに刺しておくことで口に運びやすくなるでしょう。それにより幼児は自分でフォークを使って食べられたことに満足し、またうまくできた喜びを養育者と共有することで、フォークを使う意欲は高まります。このように、子どもが自分の機能を試し、確かめ、できたことを喜ぶとともに、他者に認められ、充実感を味わう経験が子どもの発達においてはとても大切です。こうした援助をするためにも、子どもの発達の方向性を知ることは重要になります。そこでは、できる・できないの評価ではなく、子どもの「やりたい」という気持ちを大切に寄り添うことで、子どもは「自分は大切にされている」「できるようになったことを共に喜んでくれる人がいる」と感じます。このように受容され、認められる体験が子どもの自己肯定感を高め、生きる力の根っこになるのです。

3. 保護者に子どもの発達の道筋を伝える

1節で述べたように誰でも最初は子育ての初心者であり、子育ての経験を通して親として発達していきます。例えば、3節で触れたイヤイヤ期では、どの親も対応に手こずります。その一方で、発達の視点から考えると自己主張は重要です。こうした子どもの発達をつかさどるメカニズムを保護者に伝えることも保育者の大切な役割です。保育者の働きかけにより、保護者は発達の道筋を知り、今ある我が子への理解が進むと同時に、親の不安に寄り添うパートナーとして保育者が傍らに居ることに安心感が得られるでしょう。また、このように子どもの育ちを共有し、保育者と保護者が同じ方向を向いて目の前の子どもを理解することは、子どもの豊かな育ちにもつながります。

最後に、「くまのプーさん」の作者A・Aミルン（周郷博訳）の「六つになった」という詩を紹介します。

一つときは、なにもかも はじめてだった。
二つときは、ぼくは まるっきり しんまいだった。
三つときは、ぼくは やっと ぼくになった。
四つときは、ぼくは おおきくなりたかった。
五つときには、なにから なにまで おもしろかった。
いまは六つで、ぼくは ありったけ おりこうです。
だから、いつまでも 六つでいたいと ぼくはおもいます。

（周郷 博 母ありてこそ（国土社）より引用）